

インドサイ "多摩王"

多摩動物公園々長

林

じゆ
寿

ろう
郎

Indian Rhinoceros "King of Tama" in Tama Zoological park

by Zyuro Hayashi, Director of Tama Zoological Park.

人間でもそうですが、体格ががっしりして、顔付きがいかめしく、ちよっと、おっかなくって、とっつきにくいタイプでも、案外心はやさしく、気の小さいことがあります。インドサイと、つき合ってみると、よくこれと似ています。

厚い皮がひだになっていて、ヨロイを着たような大きな体に、鼻の穴と間違ひそうな低い所にお粗末な目玉がついていて、寄らばひと突きと言わんばかりに鼻の頭に角を生やしています。

ところが、注意してみると、ユリの花のような大きな耳を、絶えず、左右に動かしていることに気がきます。

あやしい音がする方向にいつも耳を向けて調べているのです。

ライオンやトラのように自信を持ち、ゆったりとした気分にいるわけではなさそうです。

さて、昨秋、11月10日にインドサイが着いたとき、先ず手こずったことは、輸送檻をゾウのお城に横付けにして扉を開いても、サイが出てきません。

これは他の動物にもよくあることです。狭い輸送檻に入れられて、さぞかし道中、窮屈な旅をしたことであろうから早く広い動物舎に出たいであろう、と考えるのは人間の勝手です。動物の側に立ってみれば、野生で、のんびり暮らしていた所を、ひどい目にあつて生捕られ、それから転々と住む場所が変わったり、色々不安な状態におかれて来たわけですから、窮屈な輸送檻でも、そこは安全で餌

が貰えるとわかれば、狭いながらも楽しいわが家で、離れ難くなるのは人情と同じわけでしょう。

こんなわけでやっと輸送檻からゾウの寝室を三つ通り抜け、自分の部屋に落付くまでには、干草に黒砂糖をふりかけた彼の好物でつったり、ホースで冷水を浴びせかけたり大騒ぎをしました。

彼の生れ故郷、印度のアッサムでは、40度という猛暑だそうですから、秋風の身にしみるところ冷水を浴びせられては、とてもかたまりません。

そこで早速、備え付けの石油ストーブをフルに運転して、急いで部屋を温めることにしました。

石油ストーブと申しましても、ご家庭でお使いになるものとはスケールが違い、高さが2米もあって、2台のモーターで、火焰と熱風を適度にサイ室に送る装置で、南極探検隊が、昭和基地に備えたものと同型で、更に馬力の大きいものです。

室温は、たちまち25度になり、濡れた背中も乾き、干草、敷藁も入れてやり、印度か



ら御持参の食料をおいしそうに食べはじめました。

インドから持参した食料は、米、豆、サファロンの根、黒砂糖などです。サファロンの根は細く切って、米飯に混ぜて炊くと、カレーライスのようになります。

さて、寝室で充分落付かせてから屋外へ出すことになりました。

しかし、サイ室は、ゾウのお城の中であって見渡しのいい、お山の上です。

インドサイは、野生の頃は沼地にすんでいたのですから、戸を開けて外に出たとたん、あんまり景色が良すぎて目を廻しても困るので、扉の所に鉄柵をして、充分外を見物してから、出すことにしました。

12月13日、動物公園についてから約1カ月目です。いよいよサイを戸外に出すことにしました。戸を開くと、久しぶりにまぶしい日光が照りつけ、サイは一步一步と用心深く

出て来ました。

なつかしい土の香りをかぎ、泥をちよっと食べ、あやしい匂いを調べていました。耳も例によってたえず、忙がしく動かし様々な音の中から、自分に危害を加えるような気配はないか、緊張しています。

ところが、青く澄んだ彼方の空からジェット機が爆音勇しく飛んで来たのです。立川の空軍基地は多摩川をはさんで直ぐそこです。びっくりしたサイは途端に走り始めました。

地面は、霜解けの赤土で、ゾウのお城は、丘の上にあります。

さあ大変です。足でも滑らせて、堀に落ちないかと気が気でありませんがどうすることもできません。

しかし、5,6回走り廻るうちに、すみなれた寝室に、とことこと自分で入ってしまいました。あゝよかったと我々一同胸をなでおろした次第でした。

"多摩王" はどんなものを食べているでしょう

毎日午前9時半と午後2時に食餌を与えます。到着後1カ月位はインドから持って来た干草 5kg に食塩水をバケツ1杯、インドの豆2kgを午前、干草5kgに砂糖400gを水にとかしてかけたもの、外米を煮て2.7kg、インドの草の根サファロン等を午後と与えました。その後は生サツマイモ1kg、ニンジン1.5kg、フスマ0.75kg、オカラ2kg、塩35g

ホスカル 35g、大豆カス0.75kg、外米 2.7kg 等を混合して与えましたが、1月11日からは干草2kg、フスマ1kg、オカラ3kg、塩70g、ホスカル70g、大豆カス1.5kg、ワラ10kg(寝室用)干草10kgに午前は食塩を午後砂糖を少々ずつ与えています。

到着以来非常に元気でよく食べています。11月25日ぐらいまでは背中に水をかけてやりましたが

現在はヒビがきれるのを防ぐためゴマ油を身体中に塗っています。室の気温は16~20°C、湿度は平均60%(理想的には70~73%)です。

インドサイの皮膚の本来の色はレンガ色で非常にきれいなものです、と担当の山川さんは話していました。

(この項、つづらはら記)

